

日本語の主語は文末にあるのか

石 綿 敏 雄

【キーワード】 主語の位置 最小理論 構文解析 語順

この論文では日本語の主語の文中での位置について最近提出された仮説のひとつについて、紹介と検討をおこない(一)、これについて筆者のたちばからの見解を述べよう(二)とおもう。(一)は生成文法のなかのGB理論、最小理論、(二)はコンピュータ言語学にかんするものであるが、そのいずれにおいてもテクニカルな問題にふれざるをえず、このふたつの分野のいずれかに不慣れな読者もあるかと考え、両方とも、多少解説をまじえて述べることにする。

(一)

日本語の語順については、いっばんに、主語をS、目的語をO、動詞をVとあらわすと、SOVになるといわれている。

これにたいして、最近、日本語の語順はむしろOVSではないかという提案がおこなわれた。つまり、目的語、動詞、主語の順序ではないかというのである。もちろん、表層でいつもこの順序でならぶというわけではなかろう。おそらく、基底にある構造がそうなっている、と解釈されるということであろう。どういう理由でそうなるのか、興味をもたれる提案である。この提案は、岩波講座言語の科学6巻生成文法(1998)におさめられた、外池滋生「第二次認知革命」のなかの「原理と媒介変数のアプローチ」のなかで、おこなわれている。これを、取りあげてみる。

外池はつぎのようにいう。「日本語は一般にSOV言語であると考えられていて、つぎのような構造をもつ「指定部先頭、主要部末尾」の言語であると考えられている」とし、たとえば「太郎が魚を食べた」は

[[DP][I' [VP[DP 太郎が V' [DP 魚を V 食べ]]]I た]

のようになるといい、さらに、つぎのように、述べる。「動詞句内主語仮説からすれば、主語の「太郎は」はS構造ではまだもとのVPの指定部にあって、LFでIPの指定部に移動すると考えてもよいし、同様に動詞「食べ」はS構造ではまだ動詞のもとにあり、LFで屈折要素の位置へ移動すると考えてもよいし、時制要素「た」の位置に主要部移動ですでに移動していると考えてもよい。これが一つの分

析である。』

この部分は、ひとつの分析である、と述べてはいるが、ふつう、よくおこなわれる分析であり、ここで外池が提案したいと考えている分析とは異なるものである。だから、かならずしも解説の必要はないかもしれない。しかし、生成文法のなかのこのグループの考えかたをよくあらわしている、とも考えられるので、やはりすこし付けくわえよう。

ここで、S 構造という用語と DP という用語が同時につかわれていて、GB 理論のころの用語と最小理論の時期になってよく使われるようになった用語がみられるが、これは、共通するところの多い、これら、ふたつの理論の、いろいろな段階の考えでよいというような感じの説明であるように見える。「と考えてもよいし」という言いかたのなかに、そのような考えかたのはばを許すきもちが感じられる。(ついでながら、筆者は最小理論という名称をもちいる。)

指定部先頭、主要部末尾とはどういうことか。たとえば動詞句のなかに、動詞と目的語をまとめた要素 V' があるが、日本語であれば、そのまえにくる要素が指定部であり、それはふつうは主語である。言語によっては主語などが動詞のうしろにあるものもあり、日本語は指定部が先頭にある、という特徴をもつ、というのである。形容詞句の「とても美しい」の指定部「とても」は先頭にあり、主要部「美しい」は形容詞句の末尾にある。一般的にいて、日本語は指定部先頭、主要部末尾という特徴をもつ。

「太郎が魚を食べた」の文では、「た」が屈折要素であると、説明されている。これをここでは I であらわしている。じゅうらいは、主語はこの屈折要素に対応するものと考えられてきた。つまり

[[DP 太郎は] I' ...

の位置に最初からあるものと取りあつかわれてきたようである。ところが、あとになって主語が最初からこの位置にあるのではなく、最初は動詞句のなかにあって、つまり「太郎が魚を食べた」というのが動詞句であって、そのなかにあった「太郎が」という要素があとで”移動する”，という考えかたになってきたようである。動詞句内主語仮説という名称から判断すると、この取りあつかいがいまだ仮説の段階にあるように受けとれるが、この仮説はずいぶんひろく使われているような印象をうける。さきの説明では、GB 理論の S 構造の段階では動詞句のなかにあり、論理形式 (LF) の段階になると屈折要素句 (IP) の指定部に移動する、とを考えてもよい、というのである。説明ではさらにそのあと、動詞じしんも移動する、ということもいわれている。このように、GB 理論や最小理論では移動という考えが自在につかわれる。これらの移動のいちいちに、ここでは言及しないが、このような移動という考えかたが自在につかわれている、ということをご自分でふれておきたい。

以上で、一般的な見解を紹介したあと、外池は自分の考えを提出することにな

る。それは、「しかし日本語の主語は PRO であり、WH 疑問文の文末に現れる「か」が WH 要素で、その位置が CP の指定部であることをあらわしているとするなら、日本語の構造は以下に示す OVS 言語の構造であることになる。

[IP[DP 太郎が][IP[I' [VP[V' [DP 魚を][V 食べ]][DP PRO][I た][DP]]]]
そして一般に主語とかがえられている「太郎が」は本当の主語である PRO のさす範囲を限定する付加部であることになる」というのである。

この提案は「もし.. なら」という仮定を置いてのものであるようなので、その一つひとつを検討する必要がある。PRO は空の主語であるが、まず「日本語の主語は PRO である」という。これは、べつのところ、つぎのように説明している。たとえば「日本では家に入る時には履き物を脱ぎます」とか、料理の本で「まず玉ねぎをみじん切りにします」などの表現で、これらの文は時制をともなった文であるのに、「が」をともなった主語をおぎなおうとすると、「大幅に文意を変えたり、文を奇妙なものにすることなしには不可能である」という。これは、英語の従属文のなかの「発音されない一般的には人を表す主語の PRO が含まれているのと全く同じ」であるという。

It is difficult[PRO to solve this problem]

かっこのなかには、だれかあるひとがこの問題を解く、ということである。そしてこの日英の類似性から「日本語の主語は PRO であり」、「太郎が」は主格ではない」という結論が出てきて、それが重要な前提の一つになる。そこには、さらに検討すべき、いろいろの問題があるようにおもわれる。

つぎの、「か」が WH 疑問文の文末にあらわれるものということについても、べつのところ、説明しているが、内容はやや複雑である。そこで、話題からややそれる部分は省略して、話題になっている部分のみについて、論旨をおうことにする。生成文法のなかでも、日本語に移動現象があるかどうかについては、かなり以前から、議論され、肯定派と否定派とにわかれていた。そして、どちらかといえば、日本語には WH 移動はないが、文末動詞をのぞき、語順を比較的自由に変えることができるという「かきませ規則」があるという考えが普及していた。主語、直接目的語、間接目的語などは比較的自由にいれかえることができる。これがかきませ規則である。これにたいして、Watanabe は、日本語にも WH 移動があるという提案をおこなった。

[君は太郎が図書館からどの本をかりだしたかどうか][誰に_]尋ねたのですか?
Watanabe は日本語の wh 疑問文では発音されない WH 演算子が WH 移動により移動している、という提案をおこなった。外池は、この提案をさらにすすめて、このばあい WH 演算子は助詞の「か」だという提案をおこなった。「か」は、古い日本語や現在の文語文では文末でなく文中におかれることもある。もとの位置にあるわけである。

いつれの日にか故郷に帰らん / 何をか言はん

このようにみえてくると、「誰にたずねたのですか」では、「か」という演算子が移動している、と考えることもできることになる。

演算子の移動について、ひとことふれておこう。たとえば英語で

You can speak English.

を疑問文にするとき、can を前方に移動し、“English”に WH をつけて “what language” とし、WH 移動をおこなって、

What language can you speak?

とする。この文の構造はラドフォート「入門ミニマリスト統語論」(外池滋生ほか訳, 研究社出版 2000) によれば

[CP[DP what language[C[C can IP[D you I' [I t VP[V speak DP t]]]]]]]]
となっている。“can”は主要部 I の位置から C の位置に移動している。“what language”という疑問の演算子をふくむ要素じしんは、VP のなかから前方の CP の指定部の位置に移動している。これが演算子移動である。移動にあたってもとの位置に痕跡 t をのこす。

この、英語の演算子移動の例からみると、外池が、さきに「WH 疑問文の文末に現れる「か」が WH 要素で、その位置が CP の指定部であることをあらわしているとするなら」といっているのは、このことに対応するものではないかとおもう。

以上のようにみることができるとすると、生成文法のなかで、日本語のこのような WH 移動にかんする見解は、まだ確定した見解ではないのかもしれない。その状況判断は筆者にはできない。これらすべてについて、どのような議論がおこなわれているのか、筆者は知らない。

あとで述べるように、筆者は、生成文法のなかのこのグループの方向で研究をすすめたことはない。だから、直接批判がましいことはいえないが、しかしつぎのことは指摘しておきたい。この部分については、「か」が文中でつかわれることは、現代の口語ではなくなっている。演算子移動など日本語の性格とえんもゆかりもないことを発想しているのではない、ということをあきらかにするために、古い日本語にこのような性質があるということにふれているのだとおもうが、現代語にないということは、日本語の性格が多少変化しているとも考えることができる。しかも「か」は、WH 疑問文だけでなく、yes-no 疑問文でつかわれるものでもある。これらの点について、問題としたいのである。

さて、はじめにもどって、外池の提案は、二つの仮定、つまり、日本語の主語は PRO であるということと、日本語にもいまふれたような WH 移動が存在するという事実と、この二つが成りたつならば、といって、提出されたものようである。この二つのうち、すくなくともどちらか一つが成りたたなければ、全体が成りたたないのであろう。前者については、そこで言及しなかったけれども、一部の文で PRO を仮定したほうがよいということをととえ認めたとせよ、すべて

の、日本語の表現で認めたほうがよいということはいえるのかどうか、どうもそう言いたいのが、そこまで提案しているのかどうか、それもわからない。それらの点をやはり問題としておきたいのである。また、指定部の位置がいつもうしろになるのかどうか、ということにも、言及がない。

外池は「世界の言語には、少なくとも表面的にみれば英語のような SVO、日本語のような SOV の 2 種類が大多数であるが、ウェールズ語のような VSO、マラガシ語のような VOS も少数ながらあり、さらに最近のアマゾン地帯の調査で少数ながら OVS と OSV の言語も報告されている。」とも述べている。これは、OVS は孤例ではない、ということの伏線とも読みとれる。しかし、最初に述べた、「日本語は OVS タイプだ」という結論は興味ぶかいとどうじに、衝撃的である。

いつのころだったか、いま思い出すことができないが、たとえば「しこのみたてといでたつわれは」のような古い日本語の例とモンゴル語の古い例の類似性を、南不二男が取りあげたことがあるような気がする。もしかすると、主語の位置のおもしろい例として考えてみてよいかもしれない。

この前半の議論をおわるにあたって、いままでの議論に直接関係はないが、語順の議論について、筆者の疑問を提出しておく。よく、SOV とか SVO とかが議論されるが、これは文を構成する要素がたがいに相対的によく独立しているばあいには、きわめて有効であると考えられる。たとえば、中国語とか英語とか日本語のような言語では、かなりよく、その特徴を指摘することができるとおもう（じつはモダリティーのことも文の構造を考えるうえで重要だとおもうが、議論がさらに複雑になるのでここではふれないでおく）。しかし、動詞のまえやうしろに代名詞的な小詞をつける、フランス語やスペイン語のような言語ではその表わしかたが二重になっていると考えられる。スワヒリ語のように、さらにそのあいだに時制接辞がはいったりすると、もはや単なる動詞ではなく、述語複合体のようなものを考えなければならなくなるのではなからうか。なるほど、日本語でも「予算審議開始」などのような複合語はあるが、特殊な文体でなければ、名詞として扱われることがおおく、ふつうは文の中核としての述語複合体とはならない。ここでいう述語複合体とは、たとえばアステカ文語などで、主格接辞、目的格接辞のうしろに目的語そのものなどがそのままはいり、動詞がつづき、それらぜんたいが語形成の音形規則にしたがって、一語としての述語複合体をつくりあげる（J. シュンプス「アステカ文語」Carl Winter 1949）というようなものを視界にいられたものである。こうなると、文の構造は

述語複合体（＋必要補足語）

とあらわすほうが適切ではないかと、筆者は考えている。SOV とか SVO などだけでは、あまりに割りきりすぎた見かたではないかと、おもう。たとえば述語構造の単純なものと複雑なものを見わけて、述語あるいは述語複合体の内部と外部

の順序を考慮してみるなど、これらの点について、全体的に、根底から、考えなおしてみることも必要ではないかとおもう。

(二)

前節ですでに述べたように、筆者は日本語 OVS 説が生成文法研究者のなかでどのように評価されたかについては、よく知らない。筆者じしんがそのなかのたちばで批判することもできない。すでに指摘したような疑問点はあるが、ぜんたいとしては、よく吟味された方法をもちいて提案されたものにちがいないとおもう。だから、可能な解の一つであろうと、考えている。しかし、最適解であるかということになると、疑いをもつ。その理由を、筆者じしんの研究のフレームワークのなかから、ここで述べてみたいとおもう。つまり、計算言語学のたちばから、考えてみるのである。

といっても、問題設定は生成というはたらきではなくて、理解というオペレーションのなかである。機械でおこなう生成にも問題がすくなくないが、理解のほうにはいっそう複雑な問題が存在する。どうして理解をさきに取りあげるのかというと、たとえば機械翻訳のばあい、入力文をまず解析しなければならぬからである。筆者のたちばは、この理解の最初の段階の、構文解析のオペレーションにかかわるものである。

自然言語の構文解析のプログラムは、現在ではひじょうにたくさん存在する。そのおおくは、驚異的なスピードで、入力文を解析してしまう。筆者はそれらのなかみをのぞいたことがないので、ここでつかうことはできない。ここで、扱えるのは、筆者じしんが作成したものである。その種のものに二つあり、はじめのものはグループ研究の成果であり、二つめは筆者が単独で作成したものである。後者のほうが、ここで話題とすることに適している。これは解析のスピードから言えばおそいものであるが、そのかわり、べつの、いくつかの性格をもたせている。(1)解析の操作じしんと解析する言語の性格を分離し、どんな言語でも、まったくおなじ手法、おなじ操作をとおして解析するように考えたこと。この操作の内容はあとで説明する。(2)句構造規則、移動を主とした変形規則、結合価など、依存関係などを、自由に組みあわせた文法を利用することができるようにしたこと。(3)上記両者のフレームにあわせて、あるていど自由に、それぞれの言語の文法とレクシコンの内容を書くことができるようにしたこと。ようするに、スピードを無視した実験的なプログラムである。作成したのは 1975 年である。

このなかの (1)のことは、もしかすると、言語の普遍性といわれるものの一部となにかの共通点をもっているかもしれないし、(3)のことは、言語の個別性と関係のあるものを部分的に共通にふくんでいるかもしれない。(3)について、その当時パラメータということばを筆者はつかっているが、あとになってつかわれるようになろうとはまったく予想していなかった。わたしが考えた普遍性と個別

性はGB理論などでいわれているものと全くイコールだというのではけっしてないし、コンピュータのプログラム作成の手法として、当時もそうめずらしいものではなかったものである。ただし、多くの言語を意識していたものとしてみると、すくなくとも日本では、同種のもの、あまり多くはなかった、ということではできよう。(2)のことは、どの文法がどのような能力をもつかを実験してみることができる、ということがある。たとえば、漱石の夢十夜の「コンナユメヲミタ」という文を解析するとき、結合価を指定した文法では、この文に「ダレカガ」という要素が欠けているということを指摘することができるが、ふつうの依存文法ではそれを指摘することができない、ということを実験することができる。ようするに、このプログラムはそのような実験的なプログラムである。このプログラムについては、いくつかの文献で報告した。国立国語研究所報告59「電子計算機による国語研究 VIII」,「岩波講座日本語」別巻などに収録されている。

このプログラムの文構造解析は、基幹となる動詞つまり述語を発見し、それと名詞句いまのことばではDPや前置詞句の組みあわせを一つひとつ検討してゆくということをおこない、ボトムアップに組みたててゆく方式をとっている。このためには、基幹となる動詞が文のどこにあり、そこから、どの方向にどんな要素があるかがわかれば、解析がより容易になる。もちろん、一つひとつの文では、文中の語順の変更ということは、いくらでもあるので、そのためには、移動を主とする変形の操作をおこなうことができるように作ってあった。しかし、やはり、ふつうの語順で、動詞が文のなかでの位置にあり、どの方向に補足することばがあるかが、あらかじめわかっていたほうが、解析が正確になるし、むだなくおこなうこともできる。そのためには、語順のタイプを指定することが、言語の個性を指定することのなかで、ことに重要性をおびてくる。筆者が語順のタイプについて、とくにつよい関心をもつのはそのためである。

そこで、もし、日本語の語順がSOVだとしたら、解析はどのようになるか。いま、句構造文法を主としてもちいることにしよう。まずこの指定にしたがって動詞を文末でさがし、そのまえにある、補足語や修飾語を一つひとつ取あげてその動詞との関連を検討、吟味し、矛盾がなければ、ボトムアップで句構造を組みたててゆく。ぜんたいが矛盾なくまとめあげられれば、解析は終了する。とちゅうで、たとえば、補足語と修飾語がさきに結合するというようなことなど、よくあることであるが、はなしを簡単にするために、いまその種のことにはふれないでおく。主語と目的語がかきませ規則でいれかわっているものも、そう困難なく解決されることにしよう。このばあい、SOVの指定は日本語ではきわめて有効で、効率よく、解析が進行すると考えられる。

さて、もし、日本語の語順をOVSと指定したらどうなるだろうか。このSはPROであるということ、なるべくはやく知らないと、Vを発見するのにむだなてまをかけることになる。そして、ようやく発見したVをてがかりに、句構造を

組み立てることになる。「が」のついた要素はふつうは付加部であるが、「太郎が魚を食べた」のような大部分の日本語の文、ふつうの文では、PRO との内容的な関連を検討しなければならない。そしてこの付加部は、文頭にあることがおおいが、そうでないことも、めずらしくはない。この内容的な検討の部分はあきらかに、ひとてま、多くなる。ただし、主語がとらえにくいような構造の文では、PRO の効用はたしかにあらたかである。しかしそのばあいも、主語または PRO があるとして、V よりまえにおいておいたほうが、ぜんたいのてまを考えたとき、はるかに得策である。

ここでいうコンピュータ言語学は、あきらかに筆者のたちばからみたものであり、コンピュータ言語学のたちばを筆者が代表しているわけではけっしてないが、コンピュータ言語学にははっきりとした目標がある。なんのために文法を研究するのがはっきりしている。そういうことからみると、理論言語学をコンピュータ言語学からみるという、まったく異なったたちばからものをいつても、それが直接の批判にならないことも、よく了解しているつもりである。しかし、理論言語学のほうで、かりに日本語 OVS 説が確立したとしても、筆者はじぶんのたちばから、それをすぐに取りいれるということはいらないかもしれない。

いままで、解析のやりかたを、まったく抽象的に述べてきた。ここで、すこし具体的に解析例を紹介しておこう。あらかじめ、結合価を指示した文法を用意したとしよう。はじめに、入力文を構成する各語についての情報をレクシコンから入手する。同音ないし同形語があればそれらのすべてを入手しておく。それから、解析に取りかかる。日本語の「ジカンガ カイギニ シュッセキスル」という文ではまずシュッセキスルという動詞を取りあげ、この動詞が文を終止するはたらしきをもつことを確認する。それから、構文的なパターンとして、「だれかが・人間の集りなどに」という格のフレームをもちいながら、入力文の動詞のまえにある要素と照合する。カイギに「懷疑」、ジカンに「時間」という同音語があっても、意味的な照合の段階で、その解を排除することができる。もし、かな漢字変換をおこなうとすると、妥当な解をこのようにしてえらぶことが可能である。意味もふくめた結合価の指示がなければ、このことは不可能になる。また、もしフランス語で、まちがった名詞句

la beau fille

を入力したとしよう。解析のとちゅう、二番めの語で解析を中止する。それは、形態論的な照合のとき、不整合が生じるからである。解析のすべての段階で、解析の結果を出力するので、どの語で不整合が生じたかがわかるようになっていく。この語形を女性形にあらためて入力すると、パスする。性数の一致のことについては、日本語ではその部分は空欄になっているので、実質的な操作はおこなわれない。

このプログラムで、SVO 型の言語はフランス語、ドイツ語などを扱ってみた。

フランス語では動詞句が基底で

V à quelqu'un

のようになっているとき、動詞のうしろの部分エンクリティックな与格の代名詞にして、動詞のまえにおくことがある。このような操作はこのプログラムで移動として実験してみた。ドイツ語では疑問やていねいな言いかたの依頼、命令のとき、動詞、主語のような語順になることがある。これも、移動のように処理した。このプログラムができたころは、移動変形の操作はアメリカなどではプログラム作成でよくもちいられていた。国際会議などで、おおくのアメリカ人からきいたことがある。

筆者はこのプログラム作成の翌年、籍をうつして、手おかにはコンピュータのない環境にうつった。工学部には物理的な距離があって、じっしつ、つかうことはできなかつたのである。このプログラムはあまり量のおおくない実験をして、それでおわりになった。そのあとかなりしばらくあって、パソコンなどが急激に普及したが、自然言語処理の環境もおおきく変ってしまった。たとえば、移動など、変形の操作は、破壊的な規則であるとして、つかわないか、べつのかたちでおこなうようになった。移動などの操作をつかうと、解析の速度がいちじるしくおおくなる。このマイナスを克服すべく、コンピュータ言語学が独自のみちをあるいたのである。機械翻訳などでも、文法的な解析だけでなく、その強力な検索能力をつかつて、いままでの翻訳例を参考にするというような手段をつかうようになった。

このような時代をむかえてもなお、筆者は理論言語学とコンピュータ実験とを結びつけることは、可能ではないかと、ほとんど空想にちかいことを考えることがある。人文のがわでコンピュータをつかうことが、いまかなり普及しているが、そのばあい、用例の検索などをおこなうことがおおい。自然言語理解の問題はすっかり理工系にまかせているようだ。人文のがわで、そのたちばと興味から自然言語理解のコンピュータ実験をしてみてもよいのではなからうか。文のあやまりを指摘するなど、応用も考えられよう。そういう、うらうちがあれば、将来の理論言語学にも、さらにおおきな関心があつまるかもしれない。これを若い研究者たちに期待するのであるが、この論文をこのようなかたちで書いた目的の一端はそこにある。